

## 五輪 人も物も使い捨て

昨日レポートしたように、コロナ禍で強行された東京五輪・パラリンピックの「影」に注目していきたい。毎日 12 日の表題記事に目がとまったので、抜粋して紹介する。

「子どもの頃からあんなに好きだったオリンピックなのに、奴隷のような扱いをされて今は悲哀しかありません」。新型コロナウイルスの感染が収まらない中、開かれた東京オリンピック・パラリンピック。東京都内の競技会場でアルバイト清掃員として勤務した 50 代女性はそう大会を振り返る。新型コロナウイルスの感染におびえ、大量の食べ残しや飲み残しを処理しながら、自分たちも「使い捨て」と感じさせられる失望の日々だった。



競技会場に入るための身分証を手にする女性—東京都内で撮影

7 月 1 日から会場で研修が始まった。設営を担う作業員らの出入りは激しかったものの、開幕前は会社から手すりなどのアルコール消毒をするように言われたことはなかった。トイレ掃除も、ゴム手袋をつけた手を便器に突っ込んで布で汚れをこすり落とすよう言われて絶句した。

競技が始まると、大会関係者が出す大量のゴミが休憩室にたまり、重いゴミ袋を 1 日に何度も集積所まで運んだ。生ゴミには、たくたんのおにぎりが捨てられていたという。おにぎり 2 個と焼き鳥 1 本が入った弁当から、外国人が焼き鳥だけを抜いて食べ、おにぎりを捨てていたからだ。大会関係者の休憩室では、スポンサー企業のペットボトル飲料を冷蔵庫から取り出して自由に飲めるようになっていた。一口だけ飲んで捨てられるペットボトルが大量にあり、それを袋から見つけるたびに集積場前の排水溝に中身を流して捨てた。

バイトに対する会社や大会組織委員会の姿勢は冷たく感じられた。「少しでも座ると組織委から会社にクレームが入る」。会社と組織委の連携不足から不快な思いをすることもあったという。会社の指示で試合中に観客席のゴミを回収していると、組織委から会社を通じて「どさくさにまぎれて観戦するな」などと注意を受けた。

「オリンピックファミリーラウンジ」と表示された休憩室には立派なソファが 3 つ置かれていた。1 日の競技が終わり選手たちが帰った後、エアコンが切れた会場の休憩室やトイレの掃除に取りかかるが、その部屋については、会社から「特にきれいに掃除するように」と指示されたという。「五輪貴族が頂点にいる階級の底辺に私たちがいるだ」という思いがしました」と振り返る女性。

時給は 1500 円。研修も含め 21 日間働いて女性が手にするのは 18 万円ほどだ。「今まで 15 くらいのバイトをしてきましたが、一番のブラックバイトでした」大学卒業後 13 年間勤めた会社を体調を崩して辞めた後に、非正規で働いてきた女性。次の仕事はまだ決まっていない。

(2021 年 9 月 14 日)